

聴覚障がい者の 悩みとその対策

Vol. 3

「音声言語を獲得することの難しさ ～9歳の壁～」



座薬を口から飲みこむとは、アツパレな孫じゃのお。ホッホッホ。

こんな間違い、ホントにあるのか?と首をひねっておるかもしれんな。これが、あるのじゃよ...

孫のように生まれつき耳が聞こえない人は、中面の解説にある通り、音声言語を獲得することが難しいのじゃ。

そのために、成人になっても日本語でのコミュニケーションレベルが小学3～4年程度で停滞してしまう者がある。俗にいう「9歳の壁」じゃ。

このことによって、「座薬」のように漢字のまま「座って飲む」と意味をとらえる・意味を正しく理解できない・助詞を上手く使い分けられないといったことが起こりうるのじゃよ。

もちろん、聴覚障がい者全員が上記に当てはまるわけではないから、そのところは注意が必要じゃ。

今回のポイントじゃ!

「聴覚障がいの発症時期によっては、音声言語を正しく獲得することが難しい障がいでもある!」



聴覚障がい者の悩みとその対策

1) コミュニケーション

子どもの難聴が“言語を獲得することの障害”をもたらすのに対して、すでに言語を獲得している大人の難聴は“情報を獲得することの障害”です。大人であれ子どもであれ、難聴は人とのコミュニケーションに障害をもたらすものです。

聴覚障がい者の悩みは、まず周囲からの音声情報が入りにくくなることです。“相手の言っていることがわからない、みんなが知っていることを自分だけ知らされなかった、そこで、もう一度言ってもらい何が起こったのか尋ねてみる、しかし、聞き取りにくいので、また繰り返してもらおう、そして、なんとか理解したつもりでいたら、聞きまちがえていたらしく、とんちんかんな対応をしてしまった”。このようなやりとりが続くうちに相手もうんざりしてしまうものです。

聴覚障がい者にとってやりきれないのは、聞こえないことそのものより、話が通じないと相手にやっかいな人間だと思われ、コミュニケーションが閉ざされてしまうことなのです。



2)聞きやすい話し方

日本人の話し方は昔に比べ、間をおかず早口になる、文末の言葉が弱く曖昧な発音になってしまうなど、聴覚障がい者にとって人の話が聞きにくい世の中になっています。耳の遠い相手だからゆっくり話さなければならないと意識しすぎると、一音節ごと区切った発音をしてしまい昔のロボットの機械音声のようなメリハリのない平坦な声になり、かえって伝わりにくくなるのです。

聞き取りやすく、理解しやすい話し方の要点を示します。

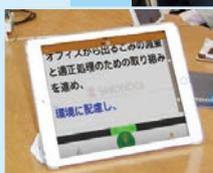
音声を認識し文字化するアプリ「UDトーク®」を使って、会話をしています。



- 細かく区切りすぎず、句読点を目安に間をおいて
- 早口にならず、ゆっくりと自然な抑揚をつけて
- 語尾を曖昧にせず、文末まではっきりと
- 自分の顔を逆光にせず、相手の顔を見て
- 複数の人が同時に話さず、一人ずつ
- 雑音や反響の少ない場所で

3) 情報保障

聴覚障がい者に必要な情報が伝わりやすくなるような環境を整えることを「情報保障」といいます。“耳からの情報保障”としては、磁気ループやFM補聴システム等の「補聴援助システム」を用意しより聞きやすくする方法があります。“目からの情報保障”としては、音声情報を文字に変えてスクリーンやタブレット端末画面などに映し出す「文字提示」、「要約筆記者」や「手話通訳者」を配置するなどの方法があります。



「UDトーク®」を使って社内会議を行っています。シオノギでは、このアプリを始めとした情報保障が当たり前の社内環境になるよう取り組んでいます。

監修・著：大沼 直紀先生

医学博士（聴覚障害学）

国立大学法人筑波技術大学名誉教授・元学長
東京大学先端科学技術研究センター元客員教授
教育オーディオロジー（聴覚障がい児の聞こえを補償する科学）の第一人者



大沼直紀の「ちょっと小耳に。」

【「みる」と「きく」】

古来中国でつくられた「目」のついた漢字には、「見る」「視る」「覧る」「看る」「瞥る」「観る」など 187 個もあります。今ではその中の相当数が使われなくなりましたが大変な数です。一方、「耳」の付いた「きく」の漢字にも、「何となくきく」という「聞く」(hear) から、「注意してきく」という意味の「聴く」(listen to ~) までいろいろありますが、それでもたった 13 漢字しかないのです。

「きく」漢字が「みる」漢字に比べて圧倒的にその数が少ないことから、一般に「聞こえること・聞こえなくなること」への関心は、「見えること・見えなくなること」に比べて薄く、聴覚のことが正しく理解されにくいことがわかります。

目
187個



『視覚の障害は“物”と繋がりにくくする。聴覚の障害は“人”と繋がりにくくする』とヘレン・ケラーは言いました。もともとは哲学者カントの言葉をヘレン・ケラーが英訳したものです。

難聴はそれ自体に肉体的な“痛み”があるものではありません。しかし、聞こえに関する問題は、人との関わりやその難聴者を取り巻く社会・環境との関わりにより、痛みを伴うことになります。“聞こえの痛み”は精神的な痛み、心理的な痛み、社会的な痛みです。聞こえの悩みは本人にとってはとても深刻なのに比べ、周りの人にはその痛みについてよく分かってもらえない。このギャップがまた更に当事者を苦しめることになるのです。



UD FONT

見やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。



シオノギ製薬

責任編集：塩野義製薬 CBF-PJ

禁無断転載

© 2018 SHIONOGI

CBFPJ-V-003 (A1)